

## 関西におけるスポーツ文化の歴史

宝塚医療大学 教授  
なにわのスポーツ研究会 会長  
後 藤 幸 弘

関西は、民間が主体で様々なスポーツ大会を生み育ててきた歴史がある。ここでは、大阪を中心に発祥した競技会を5つに分け、その代表例の紹介を通して関西におけるスポーツ文化の歴史に迫りたい。

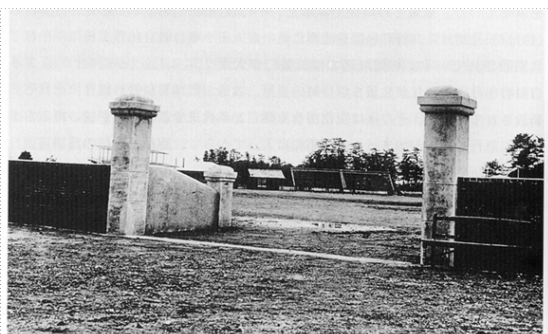
### (1) 戦前にスタートしたもので現存しない大会

#### ーマラソン大会ー

1909(明 42)年 3 月 21 日、大阪毎日新聞社主催で行われた「阪神間 20 哩マラソン大会(神戸湊川～大阪西成大橋)」は、我が国最初のマラソン大会といわれている。これに先立ち、堺大浜において「8時間 50 マイル長距離走」等々が開催されているが、マラソンという名称を冠する競技会はこれが初である。この大会は、優勝 300 円(現在の 800 万円に相当)の賞金レースで、莫大な賞品や景品が手に入り庶民の話題となり、報道を通して「マラソン」は、人々に強く印象づけられた。これまでの長距離走大会では、車夫や郵便配達人の活躍が目立っただのに対し、学生が選手として活躍する転機となった大会といわれている。

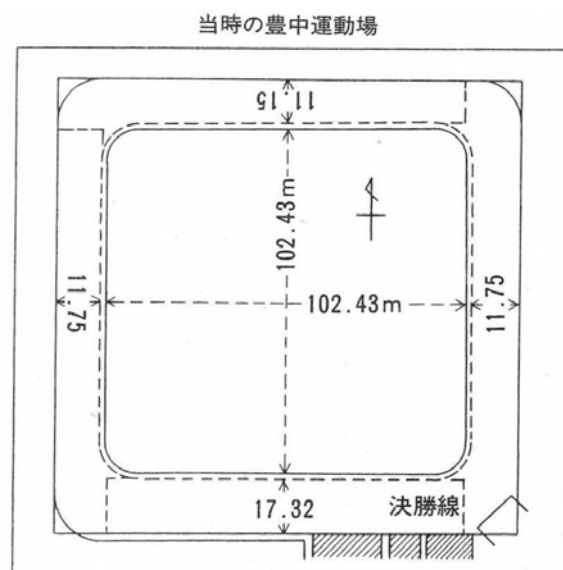
#### ーオリンピック大会ー

日本がオリンピックに初参加したのは、第 5 回ストックホルム大会(1912 年)である。その翌年の 1913(大 2)年 10 月 17 日～19 日の3日間にわたって、大阪毎日新聞社は豊中運動場で「第 1 回日本オリンピック大会」を開催しているのである。この大会は、1925(大 14)年の第 8



「豊中運動場の正面門」

(1988年、正面の向かい側にメモリアルパークが整備され、野球の始球式等のレリーフが刻まれている)



回大会まで続いた。オリンピックという名称を冠に頂く本格的な陸上競技大会だけに企画者達の苦心は大変であったという。大国寿吉は『スポーツ生活半世紀』の中で次のように述べている。「オリンピックという以上競技規定もできるだけ正規のものとしなければならないので、西尾守一、木下東作、山口造酒、それに私も社に集って研究したものである。(中略)滑稽だったのは高跳に使用するクロスバーである。その頃は紐を用いていた。とにかく書物によってどんなものかは判りそれを使用することになったが、クロスバーを何と訳するかが問題となり山口教授の意見により、表高棒とした次第である。」

施設は、箕面有馬電軌(現阪急電鉄)が1913(大2)年5月に開設した約2万㎡(140×140m)の敷地に芝生やスタンドを設けた豊中運動場が使用された(それぞれ100mの直線からなる1周400mの四角形のトラック、図参照)。実施種目は、円盤投と槍投を除き、あとは近代オリンピックの陸上種目がとりあげられた。従前に運動会で見られた余興的な種目は姿を消し、今日の陸上競技大会に匹敵する本格的な大会であった。「日本オリンピック大会」の成功によって、京阪神における陸上競技は発展の一途をたどり、人見絹枝をはじめ、オリンピック、極東選手権大会において活躍する選手を輩出し、大阪は陸上競技の黄金時代を迎えている。

また、パリで開催された「第1回万国(国際)女子オリンピック大会(オリンピックに女子の参加が認められていなかったのもので作られた大会)」のわずか2年後の1924(大13)年、陸上、水泳、野球、テニス(軟庭、硬庭)、バレーボール、バスケットボールを総合した「日本女子オリンピック大会」が大阪市立運動場等で開催された。16の府県から1800名の参加があった。会場にもなった市岡高女は、全種目に出場し大会を盛り上げた。本大会は、表に示すように、昭和10年の第12回大会をもってその幕を閉じたが、これまでの男性中心のスポーツ界にあって、画期的ともいえる女性のための総合スポーツ大会で、各種の女子スポーツの発展に大きく貢献した。

回	日 程	会 場	主 催 者	種 目
1	大正13年 6月15日・16日	大阪市立運動場 大阪市立市岡高女	健母会 中央運動社	陸上・水泳・野球・軟庭・硬庭 ・バレー・バスケ
2	大正14年 4月12日～5日 9月13日(水泳)	大阪市立運動場 大阪市立市岡高女	健母会 中央運動社	陸上・水泳・野球・軟庭・硬庭 ・バレー・バスケ
3	大正15年 5月16日	大和美吉野運動場	健母会 中央運動社	陸上 ・バレー・バスケ
4	昭和2年 5月21日・22日 7月22日(水泳)	大和美吉野運動場	健母会 中央運動社	陸上・水泳・野球・軟庭・硬庭 ・バレー・バスケ
5	昭和3年 5月5日・6日 9月23日(水泳)	大和美吉野運動場	健母会 中央運動社	陸上・水泳
6	昭和4年 4月28日・29日	大和美吉野運動場	健母会 日本女子スポーツ連盟	陸上・水泳 ・バレー・バスケ
7	昭和5年 5月10日・11日	大和美吉野運動場	日本女子スポーツ連盟	陸上 ・バレー・バスケ
8	昭和6年 5月9日・10日 9月23日(水泳)	大和美吉野運動場	日本女子スポーツ連盟	陸上・水泳 ・バレー・バスケ
9	昭和7年 10月16日・17日	大和美吉野運動場	日本女子スポーツ連盟	陸上・水泳 ・バレー
10	昭和8年 7月28日～31日	大和美吉野運動場	日本女子スポーツ連盟	陸上 ・バレー・バスケ・卓球
11	昭和9年 11月23日	大和美吉野運動場	日本女子スポーツ連盟	陸上 ・バレー・バスケ・卓球
12	昭和10年 9月29日	甲子園南運動場 甲子園浜プール	日本女子体育連盟	陸上・水泳

## (2) 戦前にスタートし現存するが大阪で開催されていない大会

### ―球技大会―

現在の「全国高等学校サッカー選手権」は、大阪毎日新聞社主催で豊中運動場で行われた「日本フットボール大会」(1～8回、ラグビーと共催)に始まる。御影師範が第1回大会から7連覇している。本大会は、後の全国中等学校蹴球大会(9～16回)、全国中学校招待(17～26回)、さらに戦後は、全国高等学校蹴球選手権(27～44回)となり、1966年から現在の「全国高等学校サッカー選手権」となった。豊中でスタートした大会は、「宝塚運動場」、「甲子園球場」、「南甲子園球場」、「西宮球技場」等を経て、1972～76年は大阪長居陸上競技場を主会場として開催された。

新制高等学校となった戦後においても大阪代表は、府立池田高校(1950年:第28回)、岸和田高校、明星高校、初芝高校、北陽高校が優勝している。しかし、1974年の北陽高校の優勝を最後に、関西の高校チームの活躍に凋落(決勝に進出できない)が永くみられた。これには、大会の開催地が1976年から東京に移ったことが影響している。競技成績と大会開催地には強い関係性があるのである。

また、日本の夏の風物詩、「全国高等学校野球選手権」も「全国中等学校優勝野球大会」として1915(大4)年、豊中運動場で村山龍平朝日新聞社長の始球式で始まった。その後、1917年から甲子園球場(1924年)が誕生するまで、阪神電気鉄道が設けた鳴尾運動場内の2つの野球場で行われた。阪神電気鉄道が大阪朝日新聞社に話をもちかけ鳴尾で行うようになったのである。野球熱が高まるにつれて、鳴尾球場のスタンドでは観客を収容しきれなくなり、阪神電気鉄道が武庫川改修地に甲子園球場を建設し、阪神タイガース[1935(昭10)年創立、株式会社大阪野球倶楽部、大阪タイガース]の本拠地として現在に至っている。

## (3) 戦前にスタートし現在も大阪で開催されている大会

前述したように「日本フットボール大会」は、ラ式(ラグビー)とア式(サッカー)に分かれている。第1回大会のラグビーには4校が出場し、全同志社が京都一商を31-0で破って優勝している。1926(大15)年の第9回大会から「全国中等学校大会」と改称され、1949(昭24)年の第28回大会より、「全国高校ラグビー大会」となった。会場は第6回から豊中運動場を離れ、「宝塚運動場」「甲子園球場」「南甲子園運動場」「西宮球技場」などと変わり、1963(昭38)年の第42回大会から現在の「花園ラグビー場(秩父宮殿下のお言葉が契機でできる)」で行われている。1949(昭24)年の第28回大会(東京ラグビー場)を除き大阪で開催され続けているラグビーは、サッカーに比して、高い頻度で関西代表が決勝に進出している。

## (4) 戦後にスタートし現在は大阪で開催されていない大会

日本最古のマラソン大会ともいわれる「全日本毎日マラソン」は、1946(昭21)年、大阪でスタートした。いたるところに焼け跡が残り、道路の使用も連合軍総司令部(GHQ)の許可を得なければならぬ時代にあって、大会創設のニュースはマラソン走者にとって朗報であった。第1回は、難波別院跡発着、国鉄池田北折り返しコースで競われた。参加賞として贈られたマラソン足袋用のゴムと布切れが大変喜ばれたという。スターターは、大会の発案者でもあるアムステルダム、ロス五輪のマラソン入賞者の津田晴一郎(関西大学卒)が勤めた。なお、第5回大会以降、毎日新聞大阪本社前発着、高石町折り返しコースに変更された。後述の高校

駅伝と同様に、大阪の交通事情の悪化により、第17回よりびわ湖にコースを移し、現在は「びわ湖毎日マラソン」として開催されている。

今では、京都の冬の風物詩になった高校駅伝も、1950年大阪で始まった。1949(昭24)年に旗揚げした全国高校体育連盟陸上競技部は、全国駅伝の開催を満場一致で決定したが距離が問題になったという。GHQは、「内蔵諸器官未発達の高校生に5kmを超える距離を走らせてはならない」とし、その説得に苦勞された。最終的には往復20マイルを6人で中継する(5km、5km、6.02km、5.98km、5km、5.04km)ことで折り合いがつけられた。コースは、毎日新聞社大阪本社前―堺市石津川往復の国道26号線で、毎日マラソンコースの大半を使用する32kmであった。広島の世界羅高校が第1・2回と連覇している。1952年、戦後初参加のヘルシンキオリンピックでマラソンに対する関心が高まり、太田博邦(天王寺高校)、村社講平、津田晴一郎らが相談し、1区10km、2、5区3kmの特徴ある7区間42.195kmとなりマラソンの世界記録とも競われている。その後、11回大会からは浜寺公園をスタート・ゴールに、1962年には堺市金岡公園―奈良県香芝町二上小学校往復コースに、さらに1964年には長居競技場の併設マラソンコースで行われるようになった。交通事情の悪化は、大阪府警をして1966年以降府内でのロードレースを禁止させ、17回大会以降、現在の京都の地に移っていった。

#### (5) 戦後にスタートし現在も大阪で開催されている大会

1982(昭57)年、大阪女子マラソンは、産経新聞社と木南大阪陸連会長等の努力によって、新春のなにわ路を駆け抜ける国際大会としてスタートした。第2回大会から日本陸連も主催に加わり、名実共に日本の女子マラソンの代表的大会(三大女子マラソン)となった。当時、日本の女子マラソンは層が薄く参加できる選手が少ないので、講習会と称して20km、30kmのタイムトライアルを行い121名の選手が集められた。第4回以降「大阪国際女子マラソン」となった本大会の歴史は、日本女子マラソンの歴史といっても過言ではない。第1回では日本選手は10位までに入賞できなかった。第11回大会で小鴨由水(バルセロナ五輪代表)が初マラソン世界最高記録で日本人初優勝している。その後の日本選手の活躍はめざましく、有森裕子(バルセロナ、アトランタ五輪メダリスト)、高橋尚子(シドニー五輪金メダル)、野口みずき(アテネ五輪金メダル)、重友梨佐(ロンドン五輪代表)を初め多くの選手が本大会から世界に羽ばたいている。

上記のカテゴリーに属さないが、戦後、各種競技団体が主催する世界選手権やオリンピック委員会が主催する大会が大阪で開催され、関西のスポーツ文化に影響している。戦前において最も大きく影響した大会として大正12年の「第六回極東競技会：市立運動場(陸上競技場、プール、野球場、テニスコート)」を上げることができる。グリコのマークはこの大会100mの優勝者がモデル(Y字フィニッシュという当時のゴール技術で、万歳をしているのではない。)といわれている。

以上のように、明治後期から大正期にかけて『大阪毎日』『大阪朝日』による上記以外の各種スポーツ・イベント開催への取り組みが本格化(堺大浜での全国学生相撲選手権大会、浜寺水練学校等々)し、関西のスポーツ文化に大きな影響を与えてきた。こうした背景には、万人向きのニュースと娯楽の提供に主力をおく紙面編集に努め、また広告獲得・販売拡大など

の企業戦略もあった。また、関西のスポーツの発展には各種イベントの会場となるグラウンド等の設置、および観客の輸送の役割を担った私鉄各社の存在が大きい。すなわち、①大会等のイベントの開催、これを可能にする②豊かな施設、それを支えた③地元企業、そしてこれらを動かした④ひとの4つのダイナミクスが大正から昭和にかけての関西のスポーツの発展を支えてきたのである。

関西の各私鉄沿線に作られた立派な施設(近鉄:藤井寺球場、大和美吉野運動場、京阪:寝屋川運動場、南海:中百舌鳥運動場、大阪球場、等々)は、日本のスポーツ界の発展を支えてきたが、その多くは現存しない。それは、東京の施設は、国立あるいは宮家に関係しているものが多いのに対し、関西のそれは民間の力で作られたものであったため住宅化や経済的理由等で消滅する運命をたどったといえる。関西は、スポーツに関連して、日本は言うに及ばず世界に大きく貢献してきた歴史があるが、それらが忘れ去れようとしている。

現在、多くの産業や政治の中心が東京に集中し、スポーツ界も「東高西低」の流れにある事は否めない。関西圏の潜在力の再活性化が望まれる。

---

#### ■筆者略歴

1946年生まれ、大阪府出身。大阪教育大学教育専攻科(体育学専攻)修了、大阪市立大学教養部保健体育科助手、兵庫教育大学学校教育学部助教授、兵庫教育大学教授を経て2012年より現職。医学博士、兵庫教育大学名誉教授、なにわのスポーツ研究会会長、一般社団法人日本体育学会代議員、一般社団法人日本ドラゴンボート協会理事。主な著作は、「最新スポーツ科学事典」(編集、共著、平凡社、2006年)、「内容学と架橋する保健体育科教育論」(共著、晃洋書房、2012年)

---

発行元・問合せ先 公益財団法人都市活力研究所  
〒530-0001 大阪市北区梅田 1-12-39 新阪急ビル 9階  
TEL 06-6344-2665/FAX 06-6344-2668